

秋 一五六句

消ゆ花火開く花火に照らされて

意気込みも新たに花火揚がりけり

手の内をあかすが如く花火爆ぜ

音に凝る花火もありてどよもせる

木斛の葉つばぴかりと秋がくる

けざやかに景立ててこそ青松毬

おろぬきどき大根台地を抜けにけり

竜淵に潜む面持ちして診られ

カルテの横秋の心臓模型かな

秋晴のポニーの鼻をまさぐる子

一秋草ひよんなはづみで田に入りて

雄日芝の引張り返すちからかな

雄日芝にくさやのにほひ移りけり

相討ちのごとく雄日芝雨に臥せ

狗尾草えのころの向きを一つに揃へたし

相俟つてゑのころ草のすがれそむ

藁耳おなもみの三度目にしてくつつきぬ

泡立草錆つくものは錆つきて

稲架棒の使ひ古しに露降りて

コスモスの空のあなたに祝儀あり

コスモスのやうに浮かれてゐたき日や

コスモスの縁^{へり}を掴みて虻沈む

私語多きコスモスを風咎立

コスモスの汚れ下葉の縮れ気味

コスモスの横に吾が顔ぶれてゐる

道形に風のくるなり草の花

花野ゆく女の服の大雑把

頼りなき日のまだ差せる鼠の尾

白粉花の勝手気ままに路地に殖ゆ

おしろいの種蒐む子のたそがれぬ

しゅんとしておしろい朝を迎へけり

庭に出て点呼取りたき石落の花

屹きつとして瑞鹿山の石落咲けり

そこまでと云ひて出で来ぬ石落日和

白芙蓉咲かせに朝がやつてくる

朔日の空にぽっかり白芙蓉

萩に萩押しつけゆける萩の中

十六夜やギターケースの胴くびれ

まんじゆさげ蹴散らかしゆく小鬼あり

料亭の一繫舟に秋日差

鶏頭の数にこだはるすさびごと

かまつかの旭にむせぶ斜面畑

阿武隈川ぶくと秋暑の泡生める

黒塚をよぎる蜻蛉の胴焦げて

智恵子生家、父の名は長沼今朝吉と聞けば

露けさの一步今朝吉宅を出で

菊人形虻の飛び交ふ千早攻め

臙脂なる菊を鎧の草摺に

白菊の束帯召せり後醍醐帝

菊人形直衣の菊に斑むらありて

枝豆を根こそぎにしぬ佐吉さき多万人たま

襤褸くそに云はれ折らるる蒸し諸

衣被だまつておいてゆきくれし

新米に葉唐辛子を目分量

今云うたそれがよささう胡桃蕎麦

泥亀町吾が前をゆく鬼やんま

張り切つてやんまがやんま追ひゆけり

空にゐる鶴田浩二の赤とんぼ

うしろにも居さうなおはぐるとんぼかな

アキアカネ墳の鞍部を乗り越えて

半島はここにてくびれ昼の虫

鯊を釣る舟が出てゐる大日向

蜻蛉は翅を頼れる楽天家

昼の虫すがれし赤のままのなか

擬態語の力を借りてぎす鳴けり

虫一つ水平飛行秋日中

手に乗せて勝手の違ふ竈馬かまごつま

跳ばむとすバツタ眼を整へて

円墳の空をバツタの脚曳きて

跳ぶ前をおんぶばつたのゆうらゆうら

とび出して土師器色なる墳の虫

稻雀立てりばらばらばらと

稻雀舞ひ降るてんでんばらばらに

初鴉にしては早すぎでは何か

巨福山裏手に鴉の鎌倉声

日が差して境内櫨黄葉いろ

暮れなづむ庭木に鴉のシルエツト

雨の鴟後姿のずんぐりと

目を止めし目白の側に目白みて
逆しまに止まる目白を目白見て
目白捕る藜をコツコツ叩きをり

同僚

白菊が机にあがる突然死

足音のびたりと止まる古典菊

笛吹川ふえふきの中州の尾花日和かな

小式部の才気走れる色にして

身勝子を通してきたる唐辛子

灌木に搦めとらるる通草蔓

快気焰あげてゐるなり烏瓜

何故のあをべうたんのからす瓜

この蔓の先の何処かに鳥瓜

爆ぜるよな朝の鳥ごゑつるもどき

激突の榧の実種を吐き出せる

ねずみもちくすみ初めたる実に夕日

檀の実弾け季よと湖のこゑ

ぐづぐづの桜の幹に秋霰雨

木斛の実の赤らめる書院窓

日表の菩提樹の実にあふむくこゑ

次郎柿釣瓶落しの日に馴れて

これといふにほひのなくて雑木の実

屈服の仕方まちまち破蓮

銀杏墜つつつつつと葉叢中

老人に落つるぎんなくなりぬ

二つ三つ爆ぜし石榴に盆地の日

口もとにぶだう運ぶは蟹めくも

くちびるに残るぶだうの皮の渋

丸顔の多摩川梨の送り主

酒・飯・梨うまくて人間好時節

舌先のぎうと縮める渋柿ぞ

栗をむく間縫ひ雑用足しに妻

熟れ柿の正体もなく日に酔うて

柿は柿らしくかためを好みけり

つやつやの中間色の柿剥けり

柿の種ペルリ提督携へて

柿好きの子規が妹にあたるこゑ

木守柿油断だんじて許されず

木守柿うからやからをもう忘れ

馬鈴薯の宅送届く紋別産

気紛れに落ちくる雨や種なすび

ゆふかぜに葉の摩れて鳴る盆の入

往き交へる人も芋殻のひと包

迎へ火のたきつけ紙をひねりけり

おがら火のト揺らぎして直なる炎

ふれ込みと違ひ野分の雨然程

盆過ぎの更に大ききうねる浪

卓袱台で卵割る音敗戦日

独り酌む筋子にたうたうたらりの灯

滑稽新聞

外骨に引きずり込まれ読む夜長

長き夜の本を持ち替へ持ち替へて

ぽつと出の社員に新宿秋夕焼

供へらる二十世紀に今日の月

庭木より栗名月を外し見る

青葉吹き散らしさしもの颱風も

けふ殊に天高けれど家に居む

離陸機の鱧のやうなる胴露けし

やや寒の鯉にゆらりと鯉寄りて

うそ寒の毘羯羅大将より拝観

黄落のいてふ男時の杜抜けて

凋落の一步手前の黄葉とも

そこそこに山吹黄葉したりけり

独特の板谷もみぢの明るさで

中国語あやつるやうにいてふ散る

紅葉狩えらい上りとなりにけり

うねる丘ぶだう黄葉の幾区画

風入れの案内当山方丈にて

風入や軸物入れの箱いろいろ

背合せに吊らる軸物お風入れ

経櫃の参之内参お風入れ

経行きんひんのごとく巡れる曝書の辺

風入れの役僧舟を漕いでをり

地獄絵の飯の炎となるお風入れ

曝涼の応拳の虎に真向へる

伝牧溪伝何くれとお風入れ

お風入れ涅槃図ごわと置まるる

袴着のそのままそのまま目つむるなよ

袴着のとんとんのぼる五十段

松手入すこし空き過ぎたかとおもふ

糸瓜吊る茎の付け根のもつこりと